

創学舎ニユース

No.242

世界が敵に

まわった日(その10)

生きることは大変だ。今だけが大変なのではなく、恐らく人生誕生のときから、生きることは大変なのである。そして、その大変さは、なかなか相対化できないので、別の意味で、また大変である。一体、人は体験したことですか、自分の価値観の土台を作れない。知性と論理を駆使して価値観を広げ言葉化していくとしても、その土台となるのは体験である。

具体例をあげて考えよう。現在八〇代の人、間違いなく戦争経験者(戦地に赴いたかとはともかく)。命の危険は日常だったし、食糧難も経験した。そして、戦後は馬車馬の如く働いて家族の生活を支えた。彼らは、戦争の時期をのりこえたことを思えば、どんな苦勞も乗り越えて行けたはずだ勿論、差別や病や人間関係の苦しみなどが、世代ではなく個人を襲つたのだが。戦争による死の危険から解放されたこと、きちんと食べられること、家族がそろっていること、電器製品が家にやってくること…。今では、なんということのない一つ一つの事実が大きな喜びであった。その子供達にとっては、親はある意味でヒーローだったかもしれない。

そして、その子供達は今は五〇代。懸命に働く親をみて育った。働くことで豊かさを手に入れることを家族で喜べた世代。自らも豊かさを目指してある程度頑張れた世代である。しかし、彼らは親達の戦争体験を共有することはない。言葉としてつけついだかもしれないが、生きられること、食べられることの喜びは、親の世代より、はるかに希薄である。

で、今の二〇代。先述した、差別や病などの個別の事情は別として、世代としては、「豊かさ」を十分に享受して育った。「豊かさ」が日常として存在していた。彼らには、戦争体験は勿論、食べられること、生きられることの喜びさえも、世代として共有されることはなかった。食べられること、生きられることの喜びが味わえないとき、人はどこへ向かうのか？それは、さらに美味しいもの、さらに快適なもの、さらに便利なものへの憧れであり、「生」が当然であるという事実、いいかえれば実感のない「生」の上のつた「自分らしさ」の追求である。

乱暴な処理の仕方、三つの世代を比較したが、体験というのは、これ程大きく人を分けるのである。体験していないことは、その人の価値観の中にくい込むことはない。類推できるのも、その人の体験の種類や程度に制限される。類推するときは、知性や感性の力を当然ながら借りるのだが、その知性や感性さえも広い意味

での体験に支配されているのではないかと思う。さて、「体験」について長々と述べてきたが、それは次の理由による。大人達が、親達が、人が生きるうえで大きな意味をもつ自分の体験を忘れていてのではないか。その体験を忘れて日々の生活に追われているのではないか。自分が体験したことを活かしていないのではないか。こいつからである。

前号までで、自分の少年時代を中心に様々な体験の一部を紹介した。そして、私は守り支えてくれた人たち、母・祖父・親類・代々の教師達、私の病気を治した関先生・ソメノおばさん…。多くの友人たち。私は、こいつら達のおかげで、自分の「生」を支えてくれた。今も同僚や家族に支えられ、かろつじて心の平安を維持して生きている。

あなた達は、忘れていませんか。親が一生懸命に生きていたことを。あなたのために、(親はそうしたいからそうしたのですが)、病院につきそい、毎日の食事を作り、運動会の応援に行き、受験の時は心配し、卒業を喜び、入学を喜び、成人を祝い、孫の誕生を喜び…。口下手だったかもしれないし、酒を飲んで暴れたかもしれないし、すぐに手を出したかもしれないし、ひよつとしたら高等教育をつけていなかったかもしれない。生きることが下手で、人にだまされたりしたかもしれない。(以下次号) (小林)

教育「名言」の紹介(16)

人生まれて学ばなければ生まれぬと同じ。学んで道を知らなければ学ばぬと同じ。知って行つて道あたわれば知らぬと同じ。

解釈 人として生まれてきても学ばなければ(人として生まれた意味がないから)生まれなかつたのと同じことだ。学問をしても人として正しい道を知らなければ(学問をした意味がないから)学ばなかつたのと同じことだ。(学んで)道を知つてもそれを実践のうちに活かすことができなかつたとしたら、知らないのと同じことだ。

《出典》貝原益軒(かいばらえきけん) 江戸・一六三〇—一七一四『慎思録(しんしりく)』
解説 『慎思録』冒頭部。学ぶことの意味が説かれていて、益軒によれば、人も生き物も同じく天地宇宙が生み出した存在だが、人と他の動物と分かつ境界は、人だけが「正気」(大脳前頭葉)をもち、そのため学ぶ能力がある点にある。道を学ばずして死ねば、人を鳥獣と区別する意味がなく、草木と等価となる。だから人は必ず学ばなければならない。では何を学ぶのか。人の正しい道である。道を学ぶのは博識のためではなく、それを実行するため。実践に活かすことで学習は完結すると言つ。ここには人間存在の意味を天地と万物との関係性のうちにおいてとらえる視点がある。自「口」を生み出した天地へ

の敬畏があり、それが「人の道」を支えている。他方万物に優越する人の根拠を「学び」に置いた。人の道を学んで実践することは、天地と万物に対する人間としての責任だった。益軒の著作は、人間が驕ることなく、自然と和樂し共生して生きる知恵に満ちている。

(アガトス教育研究所)

受験生よ！覚悟しろ！

人間は、窮地になると、ものすごい力(能力)を発揮することがある。一方で、このままではまずい思いながらも、動く気力がわいてこなくて、ボーンとしてしまつこともある。どつたら、生存の可能性を高めるかは自明だ。勿論前者である。(これに、冷静な判断が加われば、更によい。)十一年前の阪神大震災時も、こつしたことが明暗を分けた。

同じテーマで身近なことを話そう。A君は、大学四年生。卒論の締切りまであと一週間。まだ百五十枚も書かなければならない。A君は、この一年卒論に向けて頑張ってきた。資料もすべてそろえてあり、あとはまとめるだけである。しかし、この二週間、全く筆が進まない。今日こそ頑張ろうと思うが、ダメだ。その苦しさに耐えかねて、パチンコ屋に足を運ぶ日が続いている。今日もそうだ。心の中には、自己嫌悪があるが、パチンコをしていれば、その日はなん

とか過ごせる。そして、夜、部屋に戻れば、また避けられない現実が厳然とある。どつと罪悪感におそわれる。重くて、苦しくて、酒をあびるほど飲んで、いつか眠りにつく……。次の日も、また次の日も……。

いよいよ、締切りまであと四日となった。もう動く気力もなく、布団に体を横たえているところに、親友からの電話。その声を聞くと、A君は、今までため込んでいたものが、堰を切つたようにあふれ出すのを感じた。心が動き始めた。彼は泣いた。泣いて助けを求めた。「来てくれ！手伝ってくれ！頼むから……。お願いだから……。」

友人というのは、有り難いものである。自分の卒論のけりをつけた友人が数名かけつけた。コンケルを飲みながら、不眠不休の共同作業が四日……。無事間に合った……。

実は、よくある話である。父母の方でも、同じ経験をされた方が、もしかしたらいらつしゃるかもしれない。とにかく、人は本当に苦しくなると、願望と逆の行動をしてしまつことがあるのだ。自分の願望を捨ててしまった訳ではない。「今の苦しさをいつの間にかもつ慣れてしまった苦しさ」を味わう「だけで精一杯なのだ。その苦しさに耐えて、その上で願望に向かって動き出す力が残っていないのだ。そして、天は厳格である。そういう日々に対しては、必ずや

一層の罪悪感と挫折感、自己嫌悪をお与えになる。そうなのだ。決して、そういう日々を重ねて幸福にはなれないのだ。

さて、受験生のみなさん！いよいよ始まつた受験シーズンの中、A君と同じことをしていないか？「このままではまずい。」と分かっているから、情眼をむさぼってはいないか？きみの願望は、もう色あせてしまったのか？きみがなりたい自分はそういう自分なのか？よく考えてほしい。覚悟を決めて、本当は、自分はどつたのか考えてほしい。どつしなければいけないのか考えてほしい。

この一年、私は、高校三年生に英語と日本史を教えてきた。余り良い講師でもなく、余り良い大人でも、余り良い先達でもなかったかもしれない。それでもきみ達に伝えたいことは山ほどあつて、しかしうまく伝える力も言葉もなく、そして今きみ達と別れようとしている。後悔も多い。そういう私だが、きみ達に伝えたいことの二つが、勝負の時の心の持ち方である。とにかくほとんどの人が苦しいのである。仮に順調にいついていても、インフルエンザで一週間も寝込めば、途端に苦しくなる。そういう時、ほんの少しの勇気が出せるかどうかで道は分かれる。毎日毎日、ほんの少しの勇気を出すのである。ほんの少しの勇気を出して、自分の願望(達成したとき心の底から喜ぶこと)を

思い浮かべるのである。「だめだったらどつしよう？」と、まだ分からない仮定のことか心をよぎつても、願望の方を選ぶのである。その願望達成のために必要なことをやるのである。毎日、ほんの少しの勇気を出して、そうするのである。それを続けるのである。続けることは、ものすごい成果をもたらす。そして、いつか、堂々と困難に立ち向かつていく用意ができてくる。

今からでもよい。毎日毎日願望を思い出し、それを大事にし、それに向かって成すべきことを成すのである。これが古今東西人類普遍の原則である。必ず道は拓ける。きみには、きみ達には、その力と素質と可能性が十分にある。ほんの少しの勇気を出して頑張つてほしい。

最後に、苦しくてたまらない時、行き詰ってしまった時は、私達に相談してほしい。愚痴も少しなら聞いてやれる。夢を追い、願望に向かい、挫折ながらもまた立ち上がるといつ点で、私達はきみ達の同士である。苦しい時はいつも上り坂。頂上に至る道はいつも険しい。

(小林)

卒業や転校等で創学舎を離れる方にも、「希望があれば、創学舎ニュースを無料でお送り致します。在籍した教室までご連絡下さい。」